

2025 年度（令和 7 年度）
福山大学 FD・SD 活動報告書

福山大学大学教育センター
教育開発部門

目次

| | |
|--------------------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 1. 第1回FD・SD研修「令和6年度教育振興助成金活用教育研究報告会」 | |
| 「令和6年度学術研究助成及びブランド研究成果発表会」報告 | 2 |
| 2. 第2回FD・SD研修 第12回福山大学教育改革シンポジウム | |
| 「福山大学開学50周年記念講演 大学淘汰の時代をどう生き抜くか？」 | 5 |
| 3. 第3回FD・SD研修 「教育におけるAI活用に関する情報提供」 | 11 |
| 4. 令和7年度福山大学学部・学科・センターのFD・SD活動報告 | 13 |
| 5. 総括 | 22 |

はじめに

教育基本法はその第9条で教員の資質・能力の向上について定めている。曰く、「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」「前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない。」と。学校教育法のいわゆる1条校たる大学の教員が、ここにいう教員に含まれないはずはない。とりわけ、大学を取り巻く内外の環境の劇的な変化の中で教員に求められる資質・能力が高度化し拡大している状況の下、それに対応しうるための研修の重要性は日増しに高まっていると言っても過言ではない。平成25年5月28日に教育再生実行会議はその第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」の中で、①グローバル化に対応した教育環境づくりを進める、②社会を牽引するイノベーション創出のための教育・研究環境づくりを進める、③学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する、④大学等における社会人の学び直し機能を強化する、⑤大学のガバナンス改革、財政基盤の確立により経営基盤を強化する、という5つの課題を掲げた。

これからの大学教員に求められる資質・能力とは、これらの課題に適切に対処しうる力であろうし、そのための研修機能ないしFD（ファカルティ・ディベロップメント）の充実強化がいつそう図られねばならない。

本学では、授業内容・方法の改善、教員の資質・能力向上等、大学教育の質的な向上を目的とした組織的な取り組みとしてのFDの重要性が早くから認識され、十数年前から独自の研修が続けられてきている。当初は、教務委員会および自己評価委員会が中心となって企画・運営されてきたが、平成21年4月に大学教育センターが設置されると、翌々年の平成23年（2011）以降は、センターの教育評価・改善部門（平成26年度より教育開発部門に改称）がその役割を引き継ぎ、今日に至っている。そのため、「大学教育センター規則」の第3条には、担当業務10項目のうちの第二として「教育内容・教育方法の改善に係る全学的な企画、推進、組織的な研修（FD）に関すること」が明記されている。同規定に基づき、現在、全学的な取り組みとして、大学教育センター教育開発部門が中心となって、FD活動を実施している。また、これらのFD活動については事務職員の参加も奨励しており、テーマによってはSD（スタッフ・デベロップメント）活動にもなっている。

令和7年度は、大学教育センター主催の全学FD・SD活動を3回実施した。また、本学では全学的なFD・SDに加えて、各学部・学科・研究科ごとの特色やニーズに合わせたFD・SD活動も行っている。本報告書は、令和7年度に実施されたこれらのFD・SD活動の記録をまとめたものである。

令和8年3月31日

大学教育センター センター長 鶴田 泰人

同副センター長 今井 航

同 教育開発部門長 木平 孝高

同教育開発部門 心理学科 中島 学、メディア・映像学科 筒本 和広

1. 第1回FD・SD研修「令和6年度教育振興助成金活用教育研究報告会」

「令和6年度学術研究助成及びブランド研究成果発表会」報告

令和7年6月18日（水）、「令和6年度教育振興助成金活用教育研究報告・令和6年度学術研究助成及びブランド研究成果発表」をテーマとして、今年度の第1回FD・SD研修を大学会館3階ICT教室「CLAFT」にて実施した。発表演題は30演題で、以下に示す。多くの学科・センターから、それぞれの教育における新たな取り組みについて報告があった。

日時：令和7（2025）年6月18日（水）

場所：大学会館3階ICT教室CLAFT

演題数：30演題

研修時間：発表開始後1時間

発表形式：ポスター発表、その他

参加者：教員148名、その他6名（助手1名、大学院生5名）、職員6名

・特色ある教育方法開発助成

| 通NO | NO | 研究(代表)者名 | 学科 | 課題名 | |
|-----|----|--------------|----------|--|--------------|
| 1 | 1 | 劉 国彬 他1名 | 大学教育センター | 中級レベルの中国語履修生を対象にするeラーニング教材開発 —4級単語リストを中心に— | PERG2024-101 |
| 2 | 2 | 前田 吉広 他1名 | 大学教育センター | インターンシップ事前研修用オリジナル教材の開発と事業化展開をテーマとした 教職員・学生協働PBL (Project Based Learning) | PERG2024-102 |
| 3 | 3 | 広瀬 雅一 | 薬 | 薬局におけるプライマリケアを想定したAIトレーニングシステムの有効性の検証 | PERG2024-103 |
| 4 | 4 | 大杉 朱美 他1名 | 心 理 | 防犯ボランティアマスター認定制度の設置による学生の学習意欲の向上とキャリア 形成支援の実現 | PERG2024-104 |
| 5 | 5 | 反田 智之 | 心 理 | 個々人に適した動画の再生速度を算出する手法の開発 | PERG2024-105 |
| 6 | 6 | 宗田 直子 他3名 | 心 理 | 公認心理師国家資格試験対策システムによる基礎力養成法の開発 | PERG2024-106 |
| 7 | 7 | 上野 貴弘 | 情 報 工 | 生成AIによる初学者特有の疑問出力を通じた講義の理解度促進 | PERG2024-107 |
| 8 | 8 | 井上 泰 | 大学教育センター | 学生の（国語科授業）観の更新を促すプログラム開発 —観察実習を方法として | PERG2024-108 |

・学生の参加する社会連携活動助成

| 通NO | NO | 研究(代表)者名 | 学科 | 課題名 | |
|-----|----|---------------|-------|-----------------------------------|--------------|
| 9 | 1 | 岩崎 真梨子 他2名 | 人間文化 | 学生と作る備後弁の活用ツールの開発 | PERG2024-202 |
| 10 | 2 | 水上 雅晴 | 海洋生物科 | 学友会海洋生物研究会の地域活動との連携定着化と継承に向けた取り組み | PERG2024-201 |

・学術研究助成

| 通NO | NO | 研究代表者 | 学科 | 研究課題 | 課題番号 |
|-----|----|--------|-------|--|---------------|
| 11 | 1 | 安藤 孟梓 | 心理 | トランスジェンダーが経験するマイノリティストレスが精神的健康に及ぼす影響—経験的サンプリング法を用いた縦断研究— | GARP 2024-101 |
| 12 | 2 | 向井 智也 | 心理 | 刑事司法参加の日韓比較 | GARP 2024-102 |
| 13 | 3 | 反田 智之 | 心理 | 視覚探索時の視線フィードバックがトップダウンの妨害刺激抑制に及ぼす影響の検討 | GARP 2024-103 |
| 14 | 4 | 宗田 直子 | 心理 | 成人期のアイデンティティ発達とウェルビーイングに関する研究 | GARP 2024-104 |
| 15 | 5 | 大畑 友紀 | 建築 | オンライン技術の進展による地方都市に居住する有識者の生活及びコミュニケーションの変化に関する研究 | GARP 2024-105 |
| 16 | 6 | 上野 貴弘 | 情報工 | メンタルヘルス不調を初期段階からケアできるスマホアプリゲームの研究開発 | GARP 2024-106 |
| 17 | 7 | 泉 貴人 | 海洋生物科 | 水族館のクラゲの学名を検証する～「水族館生物学」の発展形を目指して～ | GARP 2024-107 |
| 18 | 8 | 本田 真知子 | 薬 | トロンピン切断型ネフロネクチンを特異的に定量できるELISA測定系の開発 | GARP 2024-108 |
| 19 | 9 | 西山 卓志 | 薬 | 低酸素領域を標的とした新規のコア構造を有する抗腫瘍活性化合物の探索 | GARP 2024-109 |

・研究プロジェクト課題

| 通NO | NO | 研究代表者 | 所属 | 課題名 | 採択番号 |
|-----|----|--------|-----------------|--|-------------|
| 20 | 1 | 呉 青姫 | 備後圏域経済・文化研究センター | 持続可能な備後地域づくりに向けての多面的アプローチ：備後地域における第六次産業化の実態と課題—農産物加工品業者の商品のブランド化に着目して— | BRP-24-01-1 |
| 21 | 2 | 大城 朝子 | 備後圏域経済・文化研究センター | 持続可能な備後地域づくりに向けての多面的アプローチ—備後企業の海外進出— | BRP-24-01-2 |
| 22 | 3 | 中村 和裕 | 備後圏域経済・文化研究センター | 持続可能な備後地域づくりに向けての多面的アプローチ：備後地域における知的障がい者に対する柔道普及に関する実践的研究 | BRP-24-01-3 |
| 23 | 4 | 中嶋 健明 | 備後圏域経済・文化研究センター | 備後文化遺産研究-備後沿岸地域の3DCG/VR技術を活用した復元と活用- | BRP-24-01-4 |
| 24 | 5 | 仲嶋 一 | 安全安心防災教育研究センター | 里海の藻場環境観測システム | BRP-24-02-1 |
| 25 | 6 | 佐藤 圭一 | 安全安心防災教育研究センター | 地域遺産としての備後柿渋の継承 —栽培・製造から流通・ブランド化まで— | BRP-24-02-2 |
| 26 | 7 | 香川 直己 | 安全安心防災教育研究センター | 里山と里の災害対策と保全のためのIoTシステムの統合に関する研究 | BRP-24-02-3 |
| 27 | 8 | 阪本 憲司 | グリーンサイエンス研究センター | 瀬戸内海島嶼における生物多様性の形成メカニズムを解明する | BRP-24-03-1 |
| 28 | 9 | 前原 昭次 | グリーンサイエンス研究センター | 天然植物を利用した“One Health”確立への挑戦 | BRP-24-03-2 |
| 29 | 10 | 有瀬 真人 | グリーンサイエンス研究センター | 豊饒の海「しまなみ」資源のSDGs | BRP-24-03-3 |
| 30 | 11 | 番匠谷 研吾 | グリーンサイエンス研究センター | 脳出血治療を指向した難水溶性抗酸化剤搭載水溶性ナノ製剤の開発 | BRP-24-03-4 |

発表は、「特色ある教育方法開発助成：8件」、「学生の参加する社会連携活動助成：2件」、「学術研究助成：9件」、「研究プロジェクト課題：11件」がポスターの展示や映像を用いたものなど様々な形式でなされ、活発な討論や意見交換が行われた。参加者は160名と大変盛況であった。今回のFD・SD研修が、各学科やセンターにおける今後の教育改善に反映されること、また新たなアイデアの萌芽となることが期待される。



2. 第2回FD・SD研修 第12回福山大学教育改革シンポジウム

「福山大学開学50周年記念講演 大学淘汰の時代をどう生き抜くか？」

令和7年9月4日（木）14：00～16：00に、1号館大講義室（01101）にて、通算12回目となる教育改革シンポジウムを開催した。本学の開学50周年を記念して開催する運びとなった。

大学入学者数に目をやると、2024年度の入学者が定員割れした四年制の私立大学が354校で59.2%に上り、1989年度の調査開始以来で過去最高を更新したと報じられている（『日本経済新聞』2024年9月13日）。また、2024年度の大学入学者数が募集定員の総計を1万人以上下回ったことが、文部科学省の調査で判っている。入学者数を定員で割った定員充足率は98%で、記録が残る2010年度以降、100%を切るのは初めてとされる。少子化による18歳人口の減少が要因で「大学全入時代」に本格的に入ったと報じられている（『読売新聞』2025年1月10日）。

この間、高等教育への進学率が上昇し、高等教育は特定の人たちに与えられた特権ではなく、誰でも必要であれば受けることができるものへと発展しているようにも見られる。一方、日本の高等教育研究者の喜多村和之教授は、もう30年以上も前に「毎年あふれるばかりの受験生を迎え、この世の春を謳歌している日本の大学にも、1990年代からは青年人口減少期という厳しい未来が押し寄せてくる」とし、「これまでほとんど閉校の経験をもたないできた日本でも、《大学淘汰》の時代が現実にならないという保証はない」と見通していた（喜多村和之『大学淘汰の時代』中央公論社、1990年3月、173頁）。

本格的に入ったとされる「大学全入時代」に、「大学淘汰」の時代が、到来していると見、記念すべき今回のシンポジウムのテーマは、「大学淘汰の時代をどう生き抜くか？」とした。わが国の高等教育研究をリードする第一人者である金子元久教授に、その基調講演を頂くことができた。金子教授に、この場を借りて深く感謝を申し上げる。

（大学教育センター センター長 鶴田 泰人）

概要

福山大学開学50周年記念事業の一環として、令和7年度の、12回目となる教育改革シンポジウムは「大学淘汰の時代をどう生き抜くか？」をテーマとし、令和7年9月4日（木）14：00～16：00に、福山大学の1号館大講義室（01101）において開催された。2部構成とし、大学教育センターの教育開発部門の部門長である、薬学部の木平孝高教授の司会で、以下のように進行した。

第Ⅰ部 基調講演（80分）

演 題：大学淘汰の時代をどう生き抜くか？

講 師：筑波大学 金子元久特命教授

休憩（10分）

第Ⅱ部 フロアとの対話（30分）

司 会：今井航教授

シンポジウムは、大塚学長の挨拶から始まった。

学長は冒頭で、「本日の会が、これから長く続く人口減少に起因する、とくに地方私立大学にとっての冬の時代にあって、本学にとってむしろ長い発展の起点になるような、特別の意味合いをもつシンポジウムとなることを期待しています」と語り、続けて「そうした時期に文字どおり絶好の講演者として、金子元久先生をお迎えできたことを大変光栄に思います」と述べ、講演への期待を込めた。



第1部の講演では、金子先生により少子化による18歳人口の減少や大学教育の質的改善に向けた動きなど、日本の高等教育が直面する大きな変化について解説があった。さらに、アメリカやドイツの高等教育制度との比較を通じて、日本の大学が抱える構造的な課題を多角的な視点から示された。特に、教育プログラムの評価と改善、授業方法の見直しといった取り組みを進めることや、個々の大学教員の取り組みを認めながらも学習制御・往還型授業への転換が求められていると強調された。また、学部や学科の縦割り構造を超えた教員間の連携強化の重要性についても触れ、大学教育が新たな段階を迎えていることを示された。

10分の休憩を挟んで第Ⅱ部では、演者の金子先生と大学教育センターの今井航教授の司会のもと、会場の教員との質疑応答が行われた。



はじめに、大学教育センターの今井教授からは、講演で紹介された「日本の特質」に関するスライドについて、「戦前はドイツ、戦後はアメリカの影響を強く受けてきた日本の高等教育の特徴がよくわかり、非常に考えさせられる内容だった」との感想が寄せられた。また、授業の準備や復習にどの程度の時間を想定しているかを問う調査で、約3割の教員が「想定していない」と回答していることに触れ、授業外での学びも含めた設計の必要性を述べられた。

続いて、メディア映像学科の中嶋教授からは、ドイツ・ハノーバーを訪問した際に学んだマイスター制度に関する質問があった。ドイツでは、プロフェッサーの地位が高く、多くの講義は講師が担当し、学生はインターンシップを経て就職する仕組みになっていることを紹介した。その上で「こうした制度をどのように評価されるか」と問いかけた。これに対し金子先生は、ドイツのデュアルシステムについて言及し、「中等教育段階から職業教育とアカデミック教育の二本立てになっており、かつては優れた制度とされてきたが、近年は職業の多様化や流動化により、従来のように職業カテゴリーを設けることが難しくなっている」と解説された。

さらに、国際経済学科の鈴木講師からは、グローバル化が進む中での人材育成について、「企業と大学がどのように対話を進めるべきか」という質問があった。これに対し金子先生は、「企業との対話は非常に重要だが、日本企業の多くは“一括採用”を前提としているため、企業側が求める人材像を明確にできていない場合も多い」と指摘。その上で「だからこそ大学が目標を掲げ、多様で流動的な人材を育てることが大切だ」と強調された。

最後に、経済学科の中村准教授からは「金子先生がお考えになる“教育”とは何か」という、かなり大きな問いが投げかけられた。金子先生は平然たる口調で「大学教育の目標は、そう簡単な言葉では表せない。考える力や葛藤する力など、一見抽象的に思える能力を育むことこそが教育であり、そのきっかけや場をつくることが重要である」と述べられ、会場は注意深く耳を傾けている様子が見られた。

疑応答の最後に、今井教授が「この先10年、20年後に向けて、私たちはどう行動すべきかという大きなヒントをいただきました。」と述べ、講演を締めくくった。その後、大学教育センター長・鶴田副学長より、金子先生への謝辞と聴講者へもお礼の言葉があり、盛会のうちにシンポジウムは閉会した。

アンケート結果

本シンポジウム終了後、アンケートを実施した。今回のテーマである「大学淘汰の時代をどう生き抜くか？」への感想を求めたところ、286名の教員から回答が得られた。

第12回教育改革シンポジウムについてのアンケート内容は、以下のとおりである。

第12回教育改革シンポジウムについてのアンケート

教育改革シンポジウムにご出席いただき、また、ご視聴いただき、ありがとうございました。今後の企画の参考にしたいと存じますので、アンケートへの回答にご協力ください。

Q1 シンポジウムの内容は興味を持てるものでしたか？（複数選択可：必須）

1. たいへん興味をもてた 2. やや興味をもてた 3. どちらとも言えない
4. あまり興味をもてなかった 5. まったく興味をもてなかった

Q2 シンポジウムについて、全体的なご感想をお聞かせ下さい。（入力必須）

Q3 今後の講演会・シンポジウムの内容について、どのようなものがご希望ですか？（複数選択可：必須）

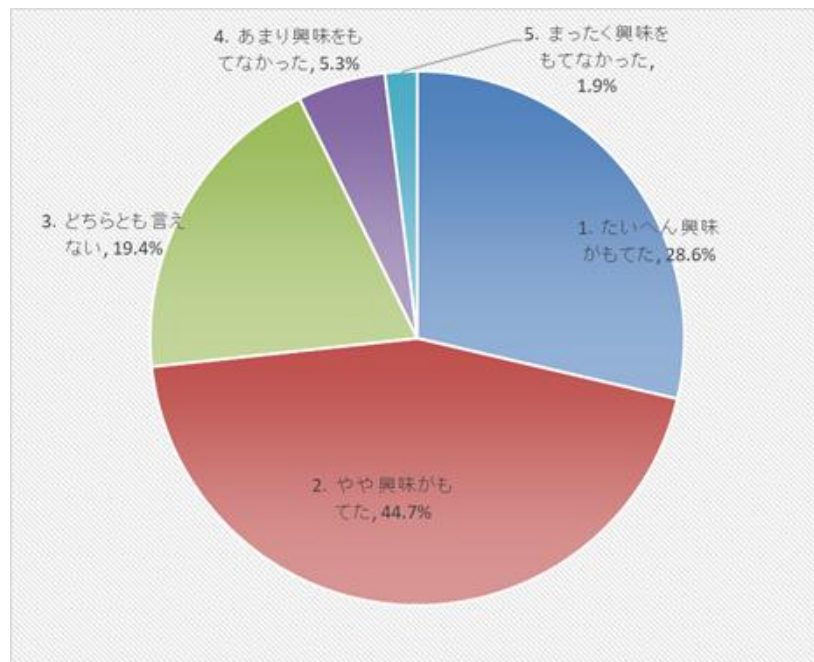
1. 初年次教育 2. 情報教育 3. 語学教育（日本語教育、外国語教育） 4. 教養教育
5. キャリア教育 6. 自校教育 7. 教育方法・技術 8. 教育評価
9. 学生の学びの様子（例えば、関心・意欲・態度／学習時間／学修成果）
10. 学生とのコミュニケーションの在り方 11. 高大接続 12. 大学間連携
13. その他（下記にご記入ください）

ご協力ありがとうございました。以下

以下にアンケート結果を示す。

「Q1 シンポジウムの内容は興味を持てるものでしたか？」の集計結果

下記の円グラフを見ると、「たいへん興味をもてた」と「やや興味をもてた」を合わせて、全体の73.3%が今回の内容に興味を持てるものであったと回答している。



今回のシンポジウムの「大学淘汰の時代をどう生き抜くか？」というテーマは、大学教員にとって非常に興味があり、有意義なものであったと考える。

「Q2 シンポジウムについて、全体的なご感想をお聞かせ下さい。」の回答結果

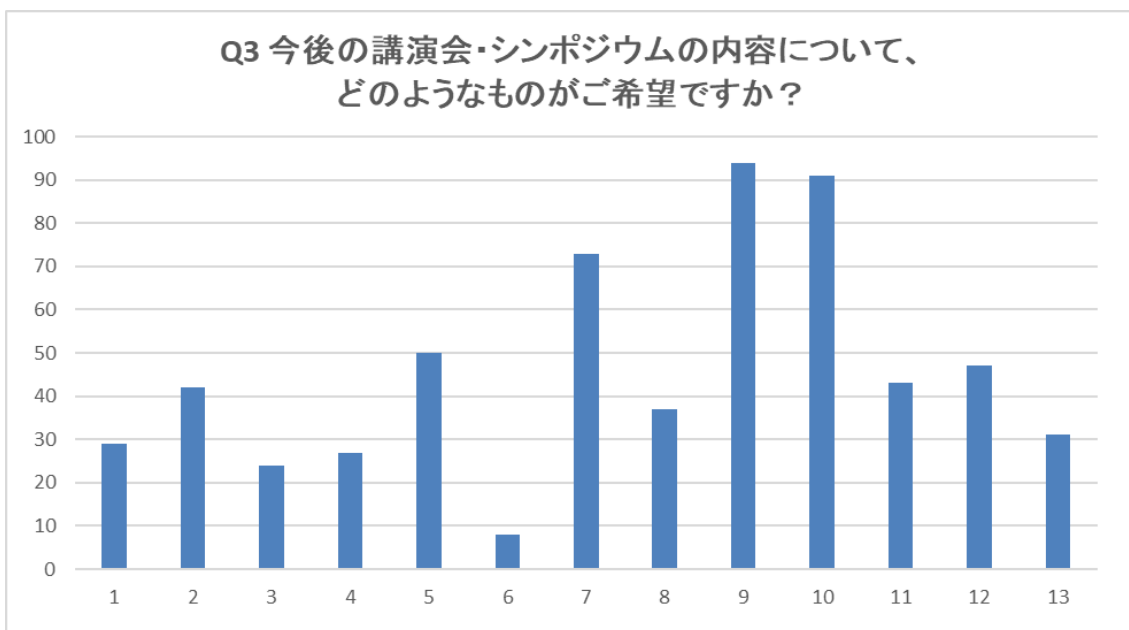
ここでは、一部の感想を示す。

- アメリカやドイツの大学モデルとの対比の中で、日本の大学の特徴をあぶり出した講演内容であり、啓発されるどころがたいへんに多かった。とくに日本では授業外の学習について教師が無頓着であるという指摘、ならびにアメリカにおける授業の公開の効用についての指摘に共感を覚えた。冒頭に言及された中教審答申「わが国の『知の総和』向上の未来像」の中身との関係で、日本の大学の現実を踏まえた講演者ご自身のより具体的な論評も聞いてみたかった。
- 大学淘汰の時代にあつて、これまでの日本の大学教育の根本がどこにあるのか、そしてどう変遷してきたかに基づき、今後の大学そのもの、また大学教育のあり方をご示唆いただき大変に有意義なお話であった。
- 日本の教育や制度について、ドイツ、アメリカと比較しながらの説明など、興味をもって聴くことができた。フロアからの質問もあり、「このように考えている人もいるのか」と参考になった。どのように教育をしていくのかは難しい問題であるが、他の教員とも対話をしながら考えていきたいと思った。
- 人口が減少し、首都圏に限られた人口が集中する日本において、地方の大学運営を継続するのは容易ではない。この状況において本日のシンポジウムでの金子先生のお話の内容は、日本、米国、欧州の歴史を振り返りながらじっくりと考えさせる内容であった。
- 教員は努力しているというご指摘は、我々にとっては励みになった。一方で、協力する必要性を改めて示された。当大学の教員間のサポートは高いと思うが、今後一層コミュニケーションを深め、情報共有等に努めていきたい。
- 日本の大学教育が、戦前はドイツ、戦後はアメリカの大学教育の影響下にあつて発展を遂げてきた経緯はよく整理されており、分かりやすかった。またこれからの制度改革に関しても欧米の試みも参照しながらどのように仕組みを変えていけば激動の時代に即したものになるのかについても、有益な示唆を得ました。
- 我が国の大学教育の方向性に対して、データを示しながら課題をわかりやすく伝えていただいた。どのような人材を育成するかという視点から、改めてカリキュラムや授業を検討する必要性が理解できた。一方で、このような課題を解決していくためには、一大学というよりは行政を含めた検討が必要であるため、少し現実離れしている側面もあったように感じた。今後の、これらの課題がどのように具現化していくのか様子を見たい。 以下 省略

「Q3 今後の講演会・シンポジウムの内容について、どのようなものがご希望ですか？」の集計結果

今後の教育改革シンポジウムの内容に関する希望調査で、希望の多かった回答は、

- 第1位 学生の学びの様子 (回答数 94)
- 第2位 学生とのコミュニケーションの有り方 (回答数 91)
- 第3位 教育方法・技術 (回答数 73)
- 第4位 キャリア教育 (回答数 50)
- 第5位 大学間連携 (回答数 47)



| Q3 今後の講演会・シンポジウムの内容について、どのようなものがご希望ですか？ | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|-----------|----|---|-----------------------|----|----|-----------|----|----|----|
| 1. 初年次教育 | | | 2. 情報教育 | | | 3. 語学教育 (日本語教育、外国語教育) | | | | | | |
| 4. 教養教育 | | | 5. キャリア教育 | | | 6. 自校教育 (例えば、福山大学の歴史) | | | | | | |
| 7. 教育方法・技術 | | | 8. 教育評価 | | | | | | | | | |
| 9. 学生の学びの様子 (例えば、関心・意欲・態度/学習時間/学修成果) | | | | | | | | | | | | |
| 10. 学生とのコミュニケーションの在り方 | | | | | | 11. 高大接続 | | | 12. 大学間連携 | | | |
| 13. その他 () | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 29 | 42 | 24 | 27 | 50 | 8 | 73 | 37 | 94 | 91 | 43 | 47 | 31 |

第3回FD・SD研修「教育におけるAI活用に関する情報提供」

実施概要

- 日程：令和7年12月3日（水）16:30～18:00
- 場所：福山大学 未来創造館2階 C0201 講義室
- 対象：福山大学教職員
- 参加者：教員114名、職員3名

プログラム及び内容

本研修では、4名の講師により、教育におけるAI活用について多角的な情報提供を行った。

(1) AI 基礎知識と導入時の注意点【20分】

講師：金子 邦彦 教授（情報工学科）

AIの技術革新により、翻訳、文章作成、データ分析が数分で可能となったことを紹介した。また、対話型AIが「アシスタント」として活用できること、本学ではMicrosoft Copilotが利用可能であることを説明した。Copilotは日本語の会話を通じて操作でき、キーボード、音声、画像による入力に対応している。具体的な活用例として、誤字の発見、データ分析、長大な資料からの情報抽出、画像からの表データ取り出し等を示した。学生による実践事例として、ゲーム制作の相談、データ分析手法の調査・比較、Pythonのコード生成などを紹介した。注意点として、AIが存在しない論文や架空の統計データを創作するハルシネーションの問題を取り上げた。また、個人情報・プライバシー・認証情報の入力禁止、未発表の研究データやアクセス制限のあるデータの入力禁止について説明した。学生のAI利用に関しては、授業教員の指示に従うことが前提であり、AIによる作業支援は認められるが、生成した成果物をそのまま提出することは厳禁である旨の周知が重要であると述べた。

(2) AI 活用の実践的事例紹介【20分】

講師：西田 友是 客員教授（福山大学客員教授・東京大学名誉教授）

生成AIを活用したCGプログラミング教育について紹介した。この教育方法では、学生はプログラミング言語の構文を自ら記述することなく、CG技法のアルゴリズム理解に集中できる。日本語プロンプトでChatGPTやCopilot等の生成AIに指示することで、レイトレーシング、Zバッファ法、NURBS曲線・曲面、流体計算など多様なCG技法のプログラムをJavaScriptとして生成できる。これらをHTMLと組み合わせることで、ブラウザや携帯端末でも動作するインタラクティブな学習環境を構築できることを示した。学生はプロンプトの改善を通じて望む機能を実現し、生成されたプログラムのパラメータを変更しながら試行錯誤することで、アルゴリズムの動作原理を

体験的に理解できる。この方法は、従来のプログラミング構文習得中心の学習から、アルゴリズム理解と AI 活用を重視した学習への転換を可能にするものであると述べた。

(3) 教育現場での AI 活用【20分】

講師：今井 勝喜 准教授（情報工学科）

3つの事例を紹介した。第1に、放送大学「計算と自然'25」において、ゲスト講師8名の収録音声から印刷教材を作成した事例を報告した。音声認識 AI「OpenAI の Whisper」で文字起こしを行い、対話型 AI「Claude」で印刷教材に適した常体文への変換・修正を実施した。第2に、専門英語の授業において、LLM 自体を解説する技術系文書を教材として用い、LLM の理解と英語読解力向上の両方を目指した事例を紹介した。この取り組みにより、学生は LLM の能力と限界を実体験に基づいて評価できたと報告した。第3に、VR とメタバースの授業において、仮想空間内で教員の代わりに LLM にプレゼンテーションを行わせた事例を報告した。VR と AI の融合による可能性をリアルに提示する狙いがあるが、音声 LLM はテキストチャット LLM に比べてデータ量が大きく高コストであるため、費用面での注意が必要であると述べた。

(4) 学生への AI 活用教育の体系的アプローチ【20分】

講師：滑川 裕介 准教授（情報工学科）

AI を活用した個別最適化教育について紹介した。従来、学生一人一人に最適化された演習問題を用意するには家庭教師や TA・SA が必要であり、人員・予算の面で困難であったが、AI の活用によりこの課題を解決できることを説明した。学生が「もっと簡単に」「もっと難しく」と指示を繰り返すことで、個人のレベルに合わせた問題に調整できる。さらに、出題と採点を繰り返すことで、AI が学生の理解度を把握し、それに応じた問題を生成できることを示した。また、専門用語の説明を求めたり、誤答に対する即時フィードバックを得たりできる利点を述べた。一方、AI が誤った情報を正解のように提示するハルシネーションへの対策として、回答の根拠を確認するファクトチェックや、複数の AI で回答の一致性を確認するクロスチェックの必要性を説明した。

成 果

参加教職員は、AI の基礎知識、教育現場での具体的な活用事例、ハルシネーション等の注意点について理解を深め、各自の教育活動に AI を導入するための知見を得た。

研修後の対応

実施終了後、オンラインシステムであるセレッソに「2025 年度第 3 回全学 F D 研修」が作成され、FD 講師を撮影した動画および説明に使用されたパワーポイントファイルを全教職員が閲覧可能としている。

3. 令和7年度福山大学学部・学科・センターのFD・SD活動報告

学部・学科・センターでは、各組織の専門性や特性に合わせて、以下表1のとおりFD・SD活動が実施された。

表1 令和7年度 学部・学科・センターFD・SD研修実施調査表

| | | テーマ | FD or SD | 実 施 回 数 | 実施場 所 | 実施日時 | 講 師 | 参 加 人 数 | 成 果 |
|---|----------------|-----------------------------------|----------------|------------------|---------------------------|-----------------------------------|---|------------------|---|
| 1 | 経済 学部 | Bloomberg 端末の新 機能など について | SD | 1 | 1号館 5階 01534 講義室 | 令和7年7 月30日 | 西村コギ ト (Bloomber g) | 5 名 | Bloomberg 端 末の新機能に ついての研修 |
| 2 | 国際 経済 学科 | 授業相互 観察プロ ジェクト | FD | | 1号館 5階 01534 講義室 | 令和7年7 月9日 | Bisset | 9 名 | 大学教育セン ターが作成し た授業研究ル ーブリック (評価指標) を基に、18か 月にわたるプ ロジェクトの 内容を紹介 し、相互に授 業を観察す ることの利点 について説明 した。 |
| 3 | 人間 文化 学部 | 日頃の授 業実施の 上での工 夫 | FD | 1 | 1号館 3階第 1会議 室 | 令和7年12 月10日 15:30～ 16:10 | 人間文化 学部FD推 進委員 (原教 授, 山崎 教授) | 29 名 | 各教員が授業 実施の上で工 夫しているこ とを話し合う グループワー クを実施し、 他学科の授業 における工夫 を知り合う機 会となった。 |

| | | | | | | | | | |
|---|-----------------|--------------|----|---|------------|------------------------------|-----------------------------|-----|--|
| 4 | 人間文化学部 | 学部内での気になること | FD | 1 | 1号館3階第2会議室 | 令和8年2月12日 15:30～ 16:10 | 人間文化学部FD推進委員 (原教授, 山崎教授) | 25名 | 授業, 学生対応, 研究, 施設に関して気になっていることをグループで話し合い, 学生の環境改善の必要性を共有した。 |
| 5 | 人間文化学部心理学科 | 生成AIの活用とその課題 | FD | 1 | 29号館3階多目的室 | 令和7年7月16日 15:20～ 15:45 | 中島学学科長 (ファシリテーター) | 11名 | 各教員毎に生成AIの活用状況と利用によるメリットや課題について報告し, その内容を踏まえてのグループワークを実施した。具体的な活用に関する理解と学生指導における課題等が明らかになった。 |
| 6 | 人間文化学部メディア・映像学科 | シラバス点検を兼ねたFD | FD | 1 | オンライン | 令和8年1月14日 18:00～ 18:30 | 内垣戸貴之 (メディア・映像学科准教授) | 10名 | シラバスを点検しつつ, 学科の教育目標を確認し, 各教員の授業における中項目との対応状況を共有できた。 |

| | | | | | | | | | |
|---|-------------|-----------------------------------|----|-------------|------------------|-------------------------------|----------------------|-----|--|
| 7 | 工学部 | 工学部の現状と定員充足 | FD | 1 | Microsoft TEAMS | 令和8年2月12日 16:00-17:00 | 梅國章 (工学部教授) | 37名 | 工学部の現状について、定員充足の観点から、経年変化、競合校のデータや対応策の効果などの情報共有と意見交換を行なった。また、新たな対応策として、奨学金などの経済的支援提供の可能性や入試科目の追加可能性について共有した。 |
| 8 | 工学部・電気電子工学科 | 定員確保に関する検討 | FD | 45 (現時点) | 02205 会議室 | 毎週木曜日 16:30～ | 香川直己 (工学部教授) | 9名 | 定員確保に向けての方略を、現状、情勢を分析し、実行計画を立て、効果を検証する場を常に設けている。 |
| 9 | 工学部・情報工学科 | 「データサイエンス演習」、「Pythonプログラミング」の授業研究 | FD | 1 | 04201 内会議スペース | 令和7年11月25日 14:50～ 16:20 | 滑川裕介、天満誠也 (工学部教授) | 11名 | 教員がAI支援環境での学修を直接体験し、指導上の課題を発見するとともに、効果的な教育手法を参加者全員で検討することができた。 |

| | | | | | | | | | |
|----|---------------|----------------------|----|---|--------------------------------|------------------------------|---------------------|-----------|--|
| 10 | 工学部・情報工学科 | 「履修登録と学び方」に関する学生への説明 | FD | 1 | 04201 内会議 スペース | 令和8年2月10日 16:00～ 16:30 | 金子邦彦 (工学部 教授) | 11名 | 全教員が説明内容を事前に統一することで、新入生が履修登録や大学での学び方を正しく理解し、円滑に学生生活を開始できる。 |
| 11 | 工学部・情報工学科 | 情報工学科 IR | FD | 1 | 04201 内会議 スペース | 令和8年3月実施予定 | 尾関孝史 (工学部 教授) | 実施予定のため未定 | 入学時の状況、GPA、資格取得等のデータを用いて多面的に分析・検証を行い、今後の学生指導に資する考察を得た。 |
| 12 | 工学部・機械システム工学科 | 障害のある学生対応について | SD | 1 | 32号館 2階 32202 室 | 令和7年4月2日 11:00～ 11:20 | なし | 11名 | 新しい障害のある学生への対応方法について情報共有と確認を行った。また、学科内の該当学生について確認し、情報共有を行った。 |
| 13 | 工学部・機械システム工学科 | 防災対策 | SD | 1 | Microsoft 365 SharePoint | 令和7年4月2日～令和7年4月30日 | なし | 7名 | 館内に新しい掲示がされたことに関連し、災害時の行動・避難誘導確認のため、教員研究室や実験室からの避難経路、防災扉・消火器位置の確認を行った。 |

| | | | | | | | | | |
|----|---------------|----------------------|----|---|--------------------------------|------------------------------|----|-----|--|
| 14 | 工学部・機械システム工学科 | 新入生アンケート結果に基づく学生募集対策 | SD | 1 | 32号館 2階 32202 室 | 令和7年5月14日 11:50～ 12:10 | なし | 10名 | 事前に、新入生に対しアンケート調査を実施した。その集計結果を関係者へ配布し、状況を確認して分析・考察を行った。引き続き、学科基本方針、具体的学生募集対策についてメール会議を行った。 |
| 15 | 工学部・機械システム工学科 | 授業研究 | FD | 1 | 24号館 3階 2432室 | 令和7年6月13日 5時限 16:30～18:00 | なし | 7名 | 新教員の授業機械システム工学入門（田中教授）を参観させていただいた。授業後にはメールにより意見交換を行った。これにより新教員の授業の様子を把握することができた。 |
| 16 | 工学部・機械システム工学科 | 安全対策・安全管理 | SD | 1 | Microsoft 365 SharePoint | 令和7年11月21日～令和7年12月26日 | なし | 8名 | 実験・実習・課外活動等の事故防止を目的とし、安全対策・安全管理のため、①福山大学安全衛生管理の手引き、②自動車整備業におけるリスクアセスメントマニュアルについて学科関 |

| | | | | | | | | | |
|----|------------------|-------------------|----|---|-----------------|--|---------------------|-----|--|
| | | | | | | | | | 連部を参加者各自で確認した。その後、留意すべき点、意見、コメントなどを記述しあった。学科内で発生した事例についても情報周知した。 |
| 17 | 生命工学部 | 生命工学部ハラスメント防止にむけて | SD | 1 | 17号館2階1721教室 | 令和8年2月19日 13:30～14:15 | 山本 覚 (生命工学部長) | 33名 | 2022年度に同様のSD研修会を行い、以来本学部ではハラスメント事案は発生していない。今年度も同様にSDを行い注意を喚起した。 |
| 18 | 生命工学部 生物科学科 | 令和7年度の学科受験動向とその分析 | SD | 1 | 17号館1階講究室 | 令和7年4月28日 16:00～16:30 | 松崎浩明 (生物科学科教授) | 8名 | 学科の入試種類別受験者動向を把握・分析し、受験生・入学者を増やす方途について議論した。 |
| 19 | 生命工学部 健康栄養科学科 | 研究授業(参観授業) | FD | 1 | 授業参観18号館18201教室 | 令和7年11月14日 10:50～12:20 令和7年11月14日 17:00～18:00 | 津吉哲士 (健康栄養科学科教授) | 10名 | 学生による授業評価アンケートの評価が高い教員の授業を参観し、授業方法について意見交換を行った。講義の工夫のきっかけが得られた。 |

| | | | | | | | | | |
|----|------------------|--------------------------------|----|---|---------------------|--|--------------------------------------|-----|--|
| 20 | 生命工学部 海洋生物科学科 | 近年の入学者の傾向 | FD | 1 | 16号館 1階図書・セミナー室 | 令和7年4月28日 16:10～17:10 | 満谷淳 (海洋生物科学科教授) | 16名 | 近年の入学者の傾向についての分析結果を共有し、多様な入学生に対する教育のあり方について議論した。 |
| 21 | 生命工学部 海洋生物科学科 | 授業研究 | FD | 1 | 16号館 1階学生実験室II | 令和7年9月29日 13:10～14:40 令和7年10月6日 13:10～14:40 | 倉掛昌裕 (海洋生物科学科教授) | 16名 | 「実験の安全管理」に関する講義を聴講し、授業方法について意見交換を行った。視覚的な理解を深めるための提示方法等について、多くの示唆を得た。 |
| 22 | 薬学部 | 研究は薬学教育に役に立つ? | FD | 1 | 未来創造館3階 110301 | 令和7年6月3日 16:00～17:30 | 大高章 教授 (徳島大学 大学院 医歯薬学 研究部 薬学域) | 38名 | 新カリキュラム導入に際して、薬学部における卒業研究を通じた薬学生の教育効果と研究マインドを持たせることの意義について研修した。 |
| 23 | 薬学科 | 研究授業(公開授業) -応用分析科学: 分配平衡, 緩衝液- | FD | 1 | 34号館 2階 34201 | 令和7年10月3日 13:10～14:40 | 井上裕文 教授 (薬学部教授) | 4名 | 国家試験でも正答率の低い医薬品の有機溶媒-水への分配平衡について演習問題を通じて学生がより理解できるように工夫されていることが聴講教員も感じ取ることができ、 |

| | | | | | | | | | |
|----|-------------|----------------------|----|---|-------------------|-------------------------------|----------------------|-------------------|---|
| | | | | | | | | | 指導方法について意見交換し、好評価であった。 |
| 24 | 薬学部・薬学研究科合同 | AI・デジタルツールとその活用方法の紹介 | FD | 1 | 未来創造館3階 110301 | 令和7年11月14日 15:00～16:30 | 番匠谷 研吾 助教 (薬学部助教) | 38名 | 急速に進むAIを活用した講義資料のグレードアップ化、職員の研究効率向上へのAIの補助的活用法などを本講演を通じて、共有できた。 |
| 25 | 大学教育センター | 第1回授業研究「地理に学ぶ」 | FD | 1 | 2011 教室 | 令和7年6月11日 (火) 10:50～12:20 | 両角遼平 (人間文化学科講師) | 9名 | 授業を観察し、「評価指標」に記入した。 |
| 26 | 大学教育センター | 第1回授業研究批評会 | FD | 1 | 01437 室 | 令和7年6月13日 (金) 12:15～13:00 | | 教員14名 (外、助手1名) | 公開した授業について、その内容・方法に関する意見を交換することができた。 |
| 27 | 大学教育センター | 第2回授業研究「英語IV」 | FD | 1 | 01108 教室 | 令和7年10月20日 (月) 13:10～14:40 | 佐藤嘉晃 (大学教育センター講師) | 11名 | 授業を観察し、「評価指標」に記入した。 |
| 28 | 大学教育センター | 第2回授業研究批評会 | FD | 1 | 01437 室 | 令和7年10月23日 (金) 12:15～13:00 | | 12名 | 公開した授業について、その内容・方法に関する意見を交換することができた。 |

| | | | | | | | | | |
|----|----------------------|--|----|---|------------------------|--|--------------------------------------|---|---|
| 29 | 大学 教育 セン ター | 第3回授 業研究 「教職実 践演習」 | FD | 1 | 01204 教室 | 令和7年10 月28日 (火) 16:30 ~18:00 | 大塚豊 (大学教 育センタ ー教授) | 10 名 | 授業を観察 し、「評価指 標」に記入し た。 |
| 30 | 大学 教育 セン ター | 第3回授 業研究批 評会 | FD | 1 | 01437 室 | 令和7年10 月30日 (木) 12:15 ~13:00 | | 11 名 | 公開した授業 について、そ の内容・方法 に関する意見 を交換するこ とができた。 |
| 31 | 共同 利用 セン ター | 本学の ICT 活用教育 の問題点 とその改 善につい て(実施 予定) | FD | 1 | 1号館 3階第 1会議 室 | 令和8年3 月16日 14:00~ 14:20(予 定) | 渡邊正知 (共同利 用センタ ー副セン ター長) | 共 同 利 用 セ ン タ ー 専 任 教 員 お よ び 共 同 利 用 セ ン タ ー 運 営 委 員 | 「ICT活用教 育に関するア ンケート」の 結果から、本 学の ICT 活用 教育の問題点 とその改善に ついて研修す る予定であ る。 |

4. 総括

令和2年度のCOVID-19の感染拡大により、FD・SD活動は状況に応じて多様な方式で実施されるようになったものの、令和5年5月にCOVID-19が5類感染症に移行したのに伴い、令和6年度以降にはほぼすべての活動が対面方式で行われた。一方で、研修会に直接参加できない教職員に配慮して、リモート参加やオンデマンド視聴などのオンライン方式が残された。令和7年度は、大学教育センター主催の全学FD・SD活動を3回実施した。学部・学科・センターのFD・SD活動は、表1に記載のとおり多様なテーマのもと開催された。

本年度第2回の全学FD・SD活動では、第12回大学教育改革シンポジウム「福山大学開学50周年記念講演 大学淘汰の時代をどう生き抜くか?」をテーマとして基調講演とフロアとの対話を行った。本格的に入ったとされる「大学全入時代」に、「大学淘汰」の時代が、到来している。記念すべき今回のシンポジウムで、わが国の高等教育研究をリードする第一人者である金子元久教授に、その基調講演を頂くことができた。